

---

# 遊園地 -A Children's Playground-

akatsuki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊園地 - A Children's Playground -

### 【Nコード】

N8544H

### 【作者名】

akatsuki

### 【あらすじ】

同性愛、近親相姦、暴力、セックス。移ろいでゆく季節の中で錯綜する思い。性描写がある予定ですので苦手な方はご注意ください。

虚ろに見上げた上空はどんよりと暗く、ビルの合間に覗く細い空からは無数の雨滴が激しく降ってくる。四方を囲む灰色の壁は濡れて重くそびえ立ち、もとより日の射さないこの場所に一層濃い陰を落としている。

今、何時だろう？

水はけの悪い古くひび割れたアスファルトに足を投げ出し、冷たいコンクリートの壁に背を預けながらぼんやりと思った。家を出たのが昼過ぎ。どこに寄るともなく真っ直ぐここへ来たのだから着いたのは1時くらいだろう。あれからどのくらいの時間が経ったのだろうか。

雨に晒された肌はすっかり熱を失い、髪からは幾滴もの雫が絶えることなく滴り落ちていく。ずいぶん長い時間こうしているような気もするし、まだそれ程経っていないような気もする。辺りを見回してみても来た時と同様に薄暗いばかりで、今がまだ昼間なのか、それとももう夕方なのかさえよくわからなかった。けれど。

どうでもいいや。

もう 関係ない。

一通り考えを巡らせてからそう思い至る。時間なんてもう関係ないのだ。

昼間だろうと夕方だろうと もう、どうでもいいのだ。

この濡れそぼった服同様に帰る時間を気にする必要なんてない。いつものようにエリックの心配を気にする必要はないのだ。

どうせ。

どうせ今日は帰らないのだから。

明日だって明後日だって もうずっと。

そう思うと少しだけ気分が軽くなった。こうして雨に濡れるのは初めてこの場所に来た日以来だ。あの時は今とは違ってもっと静か

な雨だったけれど。

あれはちょうど一年前、まだ日本を訪れて間もない頃だった。新しく始まった生活はそのすべてが今までとは全く違い、失ったものをより一層強く感じさせられるものだった。何を見ても何を聞いても望むものはもう無いのだと　そう言われている気がした。好きなことをしていいと言われてもしたいことなどなかったし、自由に外へ出ていいと言われても行きたい場所などなかった。ただ時間が過ぎてゆくだけの毎日だった。何もしたくなかったし誰とも話したくなかった。

けれどそんなぼくを見るエリックはいつも悲しそうだった。心配そうに向けられる眼差しはとても優しくなかったけれど、期待に添うことも出来ずに逃げるように外へと出掛けた。それでも何もしないことに変わりはなかったけれど、ぼくが外出することをエリックは喜んだ。自主的に何かをするのはいいことだよ　そう微笑みながら　ぼくは毎日出掛けた。お昼にエリックが用意してくれた食事をなんとか摂り、家を出て、行くあてもなく時間が経つだけを待った。そして日が暮れる前には帰宅して、夜には適当な作り話をさもその日見たりやつたりしたことのようにエリックに話した。猫の頭を撫でたとか、綺麗な石が落ちていたとか、そんなどうでもいい作り話を嬉しそうに聞くエリックを見ると、なんだか悲しいような寂しいような気分になったけれど、ほかにどうしたらいいのかも思いつかなかった。

そうしてその日もいつものように行くあてもなくふらふらと歩いていた時だった。

ふと目に入ったのだ。ビルとビルとの間にぽっかりと空いた狭い空間が。

それは奥の暗がりに向かって真っ直ぐと伸びていた。何の変哲もないその路地の入り口が何故か気になり、誘われるまま奥へと進む

と路は突き当たりで右に折れ、その先は行き止まりの袋小路になっていた。灰色の壁に囲まれた微かに下水の臭いが漂うそこは、移りゆく季節も訪れないような薄暗い場所だった。

引き寄せられたのはきつと似ていたから。

灼けつくような懐かしさと冷たい絶望が吹き溜まるあの場所に。

それはぼくが一度死んでもう一度生まれた　深い闇が潜む場所。結局、戻ってきたのだと思った。すべての始まりの場所に。ずっと思っていた。帰る場所があるのだと。

すべてを失くしても最後に必ず残るぼくだけの場所が　。

そしてそれは温かい腕の中だと　本気でそう思っていた。

けれどそれは分不相応な幸せに慣れたぼくの思い上がりで、本当はここが、この汚く薄暗い場所がぼくに用意された最後の場所だったのだ。

待っていたのだ　闇が口を開けて。

泡沫の夢から覚めたぼくが再び戻ってくるのを。

罪の中でしか在り続けられないこの生を終わらせるために。

一体どのくらいそこに佇んでいただろうか。

気づけば絹のような雨が細い空から降りそそぎ、辺りの空気同様にぼくの服もすっかり重みを増していた。なんだか心地が良かった。雨に霞む視界も、遠のく大通りからの雑踏も、重く纏わりつく衣服でさえ、犯した罪に優しく馴染んでゆくようで　。

その日からいつ止むとも知れない雨が何日も降り続き、まるで世界が不透明な水にのまれていくかのようだった。すべてのものが深いベールに覆われ、閉ざされ隔絶されていくような気がした。夏の訪れを前にしてやってくるこの季節を梅雨というのだと後から知った。その日は例年よりも少し遅めの梅雨入りだったのだ。

それ以来、日中のほとんどを毎日この場所で過ごした。日に日に

諦めの甘い種が育つてゆくを感じながら、それでも心のどこかで待ち望んでいたのかもしれない。覚えていないはずもない記憶の中の奇跡を。幾度となく聞いたその瞬間が再び齎されるのを。

そういえば。

今朝は金魚にエサをやらなかつた。手のひらの最後のタブレットを口に入れながら、いつもの日課をすっかり忘れていたことを思い出す。忘れたことなんか一度もなかつたのに。

梅雨が明けた夏のある日、いつものように出掛けようとしていた。ぼくにエリックが縁日に行こうと誘ってきた。そして一度行ったことのある日本の季節行事がどんなに物珍しく美しかったかを話してくれた。

きつと楽しいよ。今日、近所の神社であるらしいから夕方に待ち合わせよう。

けれどエリックが待っていると言った場所にぼくは行かなかつた。待ちぼうけをくらったであろうエリックは、それでもそのことには触れず、ただ、お土産だよ、とビニールに入った金魚を差し出した。

エリックがいつも気づかってくれているのはよくわかつていた。縁日に行こうと誘ってくれたのも、ぼくが少しでも何か楽しいことを見つけられるようにと思つてのことだ。けれどそんな風にされればされるほどどうすればいいのかも何を言えばいいのかもわからず、結局控えめに視線を落として黙るしか出来なかつた。

そうして受け取られることのなかつた金魚は、次の日、ガラスの金魚鉢に入れられ朝の光をきらきらと浴びていた。ふちに淡い緑をおとしたガラスに揺れる紅色の金魚は優雅で美しく、隔離された水の中から出ることなく一生を終えていくその姿はひどく幸せそうだった。以前はぼくもこの中にいたのだ。ゆらゆらと泳ぐ金魚のように、甘い檻の中で穏やかな光に包まれ満たされていた。そこには望

むすべてがあつた。もう二度と取り戻せないけれど、触れることさえ出来ないけれど、せめて眺めていたかつた。だから毎日エサをやり世話をした。この檻が　　ずっと続くようにと　　。

もう、二度と取り戻せないから　　。

口の中ですでに溶け始めているタブレットを噛み砕きながら、ぼくはゆっくりと目を閉じた。

こうして雨の中永遠に続くかのような隔絶に身を委ねると、すべてが悪い夢で本当は今も変わらずあの穏やかな光の中にいるかのよ  
うな幻想に囚われる。意識が朦朧としてきた今、隔絶感はお一層  
強く心地いい。先程まで聞こえていた雨音も、肌に落ちる水の感  
触も次第に消えてゆき、別世界のように静寂が辺りを支配しはじめる。

過去だけを見たかつた。

なにものにも邪魔されることなく、ただ過去だけを　　。

だから　　。

夏が来る前に。

この隔絶が終わってしまう前に。

ここで。

この場所で。

無かつた事にしなくちゃいけないから。

奇跡は二度起きないから。

降りしきる雨の中、ぼくは手首を切つた。

流れる紅い筋が濡れた肌に溶けていく様は、揺れる金魚のように優雅だつた。

愛してるよ。

薄れてゆく意識の中で遠い記憶が風のようにやさしく耳をかすめる。

それはぼくが言った言葉なのか、それとも言われた言葉なのか。  
水の中に漂うような浮遊感を感じながら、愛され抱きしめられる夢を見る。

それが。

しっかりと抱きしめてくれるその腕が。

ぼくのよく知るあの温かく力強い腕であるなら、ほかには何も望まない。

たとえ夢でも。

たとえ幻でも。

覚めることがないのなら。

消えることがないのなら。

きつとそれは 現実と変わらないはずだから。

## #2 直哉 Forbidden Colours

幼い頃、母の寝室でコンドームを見つけたことがある。

それはアンティークの豪華な鏡台の引き出しの中、花をあしらった十センチ四方の上品な四角い缶に入れられていた。

色とりどりの小さなパッケージが缶の中で乱雑に重なり、半透明のパッケージからはピンクや水色の中身が薄く透けていた。その色や外から窺える丸いリング状のような形にも興味を惹かれたが、何よりもパッケージの内側に密着している部分から感じとられる濡れたような質感が妙に気になった。

それが何の為に使われるものなのかは見当もつかなかったけれど、子供心に秘密めいたものを感じ頻繁に眺めるようになった。その度に封を開けてみたい衝動に駆られたが、さすがに自分のものではないそれを開けるのは躊躇われた。母の私物を勝手に見ているという後ろめたさもあり、しばらく眺めたあとは何事もなかったように元通り仕舞っておいた。

両親はともに仕事が忙しく帰宅が遅くなる事も少なくなかったため、自宅にいる時は一人で過ごすことが多かった。そんな時はたいがい父や母のプライベートな部屋に入り、時には蔵書の中から適当なものを読み、時には部屋にあるいろいろなものを子供らしい好奇心と憧れをもって眺めていた。

父のコレクションの腕時計、母のアクセサリーや香水、仕事関係の書類、仕事ともプライベートともつかない写真、高価そうな革の文具類など、数えればきりがなかったけれど、そのどれもが内容や価値はわからないまでも大人への憧憬を刺激するには十分だった。普段あまり接する機会のない両親の持ち物であるがゆえの興味もあった。

そうして部屋に入っていることは父にも母にも内緒で、部屋を出る時には痕跡を残さないよう注意深く片付けた。無断で部屋に入ったことを見咎められた事はなかったけれど、良くないことをしているという自覚があったのだ。

それに父も母も息子であるおれのことになにかと煩わされるのをあまり好んでいない、というのもなんとなくわかっていた。特に母から向けられる眼差しの奥には冷たい嫌悪が潜んでいるような気がしていた。

「直哉くん？」

不意に呼ばれて振向くと、カラーコンタクトを入れた薄い瞳と視線がぶつかった。ベッドサイドに置かれたランプの鈍い灯りが肌に深い陰翳を落としている。

「どうしたの？ ぼーっとしちゃってさ」

「うん、いや、なんでもない。ごめんね？」

軽い微笑みに謝罪の言葉をのせながら、なおもその陰翳を眺め続ける。ヴィクトリア王朝時代の装飾を模した室内とともに、まるで虚構の舞台装置のようだと思いつながら。

「いいよ。それより……ね、はやく……」

囁かれる声は仄暗い甘さを含み、吐息が誘うように絡みつく。

おれは促されるまま視線を落とし、手の中の小さなパッケージの封を切った。

いつもと同じ会話、同じ行動、同じ快樂。

繰り返される記憶も、使い回される日常も、すべてが変わることなく過ぎてはやって来る。

時が動いているのかどうかさえわからない、静かで平和で、そしてどうでもいい毎日。

あの日。

好奇心に勝てずとうとうそこから一つ持ち出し自室で中身を見た

あの日、ひどく後悔をした。相変わらず使途は不明だったけれど、ぬめりのある薄い感触が放つ淫靡な色彩と母のものを無断で持ち出した罪悪感がいまって、なんだか取り返しのつかない事をしたような気がしたのだ。

それ以来、おれは父の部屋にも母の部屋にも立ち入るのをやめた。けれど父や母の部屋で憧憬をもって眺めたそれらのものは時が経つにつれてゆっくりと姿を変え、静かに深く沈む澱となっていていつまでも消えることはなかった。

もしもあの頃。

両親が幼い息子のしたことを知ったとしたら彼らはどんな顔をしたのだろうか。

子供ゆえの無邪気な好奇心だと笑っただろうか。

それともいやらしい子だと蔑んだのだろうか。

そして今。

もしも両親が息子の本当の姿を知ったとしたら彼らは何を思うのだろうか。

裏切られたと思うだろうか。そう思っただろうか。もしくは思っただ通りだったと。そう思っただろうか。

「……あんっ……なおよくんっ……」

腰を突き上げる度に吐き出される女の甲高い声が部屋に響き渡る。

おれの名前を呼ぶその声に應えるように軽い笑顔を浮かべ、さりげなく視線を外す。

「気持ちいい？」

「んっ……きもちいい……」

「そう、よかったね」

「……もつと……はあっ」

セックスの合間の意味のない言葉。

意味のない言葉の合間には価値のない微笑み。

そして終息を迎えるまで続けられる律動。

かつて母の寝室でこっそりと眺めたものは、今ではすっかりおれの日常に溶け込んでいるけれど、それでもいつもこの瞬間、思い出すのだ。

母を、母の眼差しを。

父の寝室、母の寝室。

父の書斎、母の書斎。

別々の生活。

それぞれの日常。

母の寝室で見つけた避妊具。

母は。

母は男に抱かれながら何を思ったのだろうか。

こうしておれの下で組み敷かれ喘ぐ女と同じように、快楽に身を委ねだらしなく口を開けて男に一層の快楽を懇願したのだろうか。

それは欲望ゆえか、感情ゆえか。

母の寝室の鏡台の中には今もあの美しい花柄の缶はあるだろうか。きつとあるだろう。

そして今も抱かれ続けているのだろう。父ではない別の誰かに。

ホテルを出て携帯の電源を入れると、留守番電話センターにメッセージが入っていることを知らせるアイコンがついていた。おそろくアラタだ。どうせたいした用事じゃないだろう。

ディスプレイの時計は17時42分を示している。少し眠ってしまっただために時間は予定より幾分遅くなっていた。夜遅い時間というにはあまりにも早かったが、バイトに行くと言って出てきた以上大幅に時間がずれるのは避けたかった。

出来る限り心配はかけたくない。

おれは手にした携帯をもう一度仕舞い、雨の中を足早に歩き出した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8544h/>

---

遊園地 -A Children's Playground-

2010年10月9日07時31分発行